

いじめにどう取り組むか

トラウマ、自殺をさせない取り組み

さいたま教育文化研究所 白鳥 勲

私がまだ学校現場で学年主任をしていた時、職員室から見える廊下で一人の女生徒が泣いていました。泣いていた理由は、4人の仲良しグループの一員だったのがトラブルでその子をはじめだされてしまったのです。原因は我々からみると些細なことです。グループの1人が付き合っていた男子生徒にふられてしまい、悲しんでいるときにフォロワーせずに「笑った」ということが仲間はずれにされた原因でした。

その後の3人の行動がなかなかのもので、食事の時は今まで食事していた場所でないところで食べたり、休み時間は隣の教室に3人が結束して行っちゃったり、仲間はずれにした一人の子を傷つける「術」は心得ていました。いっさい、会話はしないで「シカト」をしています。

ただし、仲間外れにされた子はちゃんと我々から見るところで泣いていま

た。泣いている時点で、私が属する3年の学年団のほとんどの教職員は理由も、誰が当面、その子の相談にのるか、グループ外の生徒でその子を「慰め」、話し相手になってくれそうな生徒は誰か、など自然に「わざとらしくない」「厚みのある」解決策がうかんでいました。そしてすぐに実行しました。

普段から回路を拡げる

3年生が入学して2年8カ月の間に学年の全員の生徒と教職員の間に深い浅いの度合いがあるにしても、相互交流のルートがほぼできてくるから前記のような対応がすぐにできました。いじめやトラブルは今のような社会状況では乱暴に言えば「必ずおこる」という構えで、自身は毎日すごしています。社会状況だけでなく、子どもはいろいろなトラブルをおこしながら成長してゆくものです。

いじめ事件なら、加害者・被害者・傍

観者・多少の関わりがある生徒すべてからほんのことが聞ける関係を築いていくことで厚みのある解決策がうまれます。普段、なにも事件が起きていないときにどれほどクラス、学年の生徒との交流が深くできているかが決定的に大切です。重いか軽いかは別にして必ず人間関係のトラブルは集団の中で起きます。そのトラブルが生徒たちの「人生勉強」になるか、「トラウマ」になるか、「死」につながるか、トラブル前の生徒たちと大人たちの心の回路が通じているかどうかにかかります。

多くの大人が関わる

もちろん、1人だけの努力では解決できるわけではないので他の先生方、事務職員を含めた学校職員、保護者、地域の方々の共同行動がなにより大切です。遠慮なく他の先生やときには親に助けを求めます。生徒たちとのさまざまな関わり合いは教職員や保護者、地域の人たちの「共有課題」だから。

今、学校教育にかかわっているんな問題が山積しています。その解決の糸口は目の前の生徒たち一人一人とまずは丁寧に関わることからみつけていくしかないと思います。そのことに多くの時間を教職員がつかえる状態にすることが緊急課

題です。

書類作り、さまざまな点検管理、人事評価システム、そして競争に勝てる指導のために教職員のエネルギーを費やさせる現在の教育行政のやりかたは子どもにとって不幸です。

いじめを生む土壌

中学生のいじめによる自殺という痛ましい事件が各地でおきています。20年来、文科省、教育委員会がほぼ毎年「いじめ防止策」「道徳教育の強化」「人権教育」の通達をだしていますが一向に「いじめによる自殺、トラウマ、不登校」は減少しません。学校教育の場が「いじめ」を発生させる土壌になっているのではないかとこの危惧を持たざるをえない状況にあるといえます。

1990年代以降、学校教育に企業と同様な「競争原理・能力主義」が持ちこまれました。一言でいうと「子どもたちがお互いの成長を相互に支援する気持ち」をもてない教育改革が政府によって導入されました。

学校と教職員そして子どもたちを競争させ、能力に応じて格付けし、高い評価の者には報償をあたえ、低い評価、要領が悪い者は自己責任という理由づけで罰を与え、排除するシステムがつくられつ

つあります。

奪われた連帯する心と技術

新自由主義・グローバル資本主義の間観は「生存競争に勝つ、支えあう集団をつくらない、自分の受け取るべき報酬は他人と分かち合うな、他人に共感するな」というものです。このイデオロギーが持ち込まれた1990年代以降は「連帯する心と技術を奪われた20年」といえます。人間の最も醜い部分を凝集した社会と教育の改変が強行された20年とも言えます。人間が持つ理性に裏付けされた感性を踏みこむシステムです。

競争力のない学校は廃校にするルールをつくるのと同じ発想で競争力のない子ども、学力・体力・生活規律が数値目標に達しない子どもを支える必要がない、という教育政策が学校現場に押し付けられています。

子どもたちは、隣にいる同世代の子は「友人」である前に「競争相手」と思えるという土壌の中で幼少期、少年期、青年期を過ごさざるをえないのです。そのような環境の中で、学校でも職場でもいじめは発生し、増加していることを見なければなりません。

感性を取り戻す

いじめによる自殺、トラウマ、不登校をなくし、子どもたちのトラウマをその後の人生経験の「糧」とすることが出来るかどうかはまわりの大人の責任といえます。子どもたちが安心して、のびのびと学び、仲間とのつながりを大切に学校生活を送ることが出来る環境をつくるのが求められています。

そのためには

- ・子どもたちとの会話を日常的に行う「時間」を教職員に保障する。

- ・学習、行事を子ども達同士で支え合う場にする。

- ・すべての教職員が全身を「目として耳として」子どもたちと接して、エピソードを報告し語り合う時間と空間をつくる。そのことを教職員の仕事の中心とする。

学校という場を「自己の将来の利益をえるための競争力」をつけるところから、他者と協力して「より多くの人たちが住みよい社会の構成員」をそだてる場にしてゆくことがなにより大切です。

人間の最も醜い部分を凝集した社会と教育の改変に対抗するには、理性に裏付けされた美しい感性を育てる取り組みをおこなうしかありません。